

# ウチとソトの関係性

## 多様化する暮らしに寄り添う住まいとは

脇坂敦史 II 構成  
Ayami II 人物撮影

対談

【建築家】Kishi Waro

### 岸和郎

### 加茂みどり

【大阪ガス株式会社エネルギー・文化研究所研究員】  
Kamo Midori



ライフスタイルは日々変わりゆく。さらにコロナ禍の影響もあり、「住まい」は、仕事や遊びも含めた生活を行う場として、重要性が増している。多様なニーズに応えるためには、新たな視点から

「住まい」を読み解く必要があるのではないだろうか？

建築家の岸和郎氏は、京都を拠点に古都の街並みにマッチしたモダニズム建築を数多く手がける。

建物のインターフェースの設計を通じたウチとソトの多様な関係性などについて、

「大阪ガス実験集合住宅 NEXT21」を担当する加茂みどり研究員が幅広く伺った。

#### 電気工学と建築史、幅広い見地での設計

加茂 「住宅のウチとソトをどうつなぐのか?」「家を開くとはどういうことか?」というテーマを考えています。岸先生は、建築家として、住宅のみならず商業ビルや大学、寺院など幅広く手がけられています。独特の世界観をもつ

作品において、建物の内外をつなぐインターフェースの設計には、とりわけ工夫を凝らされているように思えます。また東京ではなく、京都を拠点にされていることもあり、住宅は自然や都市といった外部の「環境」だけではなく、歴史や文化とも接点をもつことを強く意識させられます。

今日は広い観点から、住宅を含

む建築がこれからの時代にどう外部との関係を構築していくべきなのか、お話を伺いたいと思います。岸先生は大学で建築史を学んだ経歴をもついらっしゃいます。建築史の研究室では、何をテーマにされていたのですか？

岸 生まれは神奈川県横浜市ですが、京都大学に進学しました。大学も最初は電気工学科に進みましたが、これでいいのかなと将来に疑問を感じているときに、ル・コルビュジェと出会います。そこからミース・ファン・デル・ローエを含むモダニズムの建築に魅せられていきました。

当時はポストモダニズムという言葉が使われはじめ、近代的な合理主義がもつ限界が強く意識されるようになった時代です。ロバー

ト・ヴェンチュリ『建築の複合と対立』といった本を読むと、ミケランジェロが20世紀の建築といわば同列に扱われているのに驚きました。私だけではなく、その頃多くの人が歴史のなかに新たな答えを見出そうとしていたのです。

研究室でよく雑談をしていたのですが、面白かったのは、ルネサンスの建築家に現代日本の建築家を当てはめてみるという遊びです。「パツァーディオは磯崎新さんだよね」とか、「アルベルティなら槇文彦さん」といった具合。そのように考えていると、中東の古代遺跡もルネサンス建築も日本の伝統建築も、いわば等価なものとして、その本質が見えてくるような気がしました。京都で建築を志し、同時に建築史を学んだことが、その後の仕事に大きな影響を与えることになったと思います。

加茂 修士論文は、土浦亀城という昭和初期のモダニズム建築家について書かれていますね。彼が設計した自邸は、現在につながる日本の都市住宅の原点ともいわれます。モダニズム建築の魅力は何であるとお考えですか？

岸 もともと電気工学科で学んでいたこともあり、原因と結果を追い詰めるような論理的な思考が好きでした。建築というのは、周辺の大きな世界のなかにもうひとつの小さな世界をつくること。ある環境のなかに設計された建物を挿入してあげると、周囲もその影響を受ける。論理的思考の彼方で、世界は変わり始める。そんな風に信じていますね。

加茂 「屋上庭園」や「中庭」の使い方をとつても、岸先生の設計には強い論理性を感じます。閉じた中庭から上へ行くにしたがって徐々に開き、都市の「借景」に至る「武蔵野段丘の家」や、周辺の環境とゆるやかに区切りながら内側にオープンな「中庭」と「空」をもつ「深谷の家」など、周囲の環境に合わせる方法論のバリエーションもとても豊かですね。

岸 絵描きや彫刻家なら、好き嫌いといった主観的な造形形ものをつくるのでしょう。でも建築家はそうあるべきじゃないと思う。

「屋上庭園」や「中庭」も、こういう雰囲気がいいよねといった感覚ではなく、周囲の環境に対しど



んなインターフェースをつくるのがいいのか、その場所を読み、論理的な視点から捉えます。したがって建物を設計するときには、その場所へ実際に足を運び、現場で自分が感じるものを大切にします。書物などからスタイルや技術を学ぶのは好きではありません。

「日本的なもの」と格闘するようになった

**加茂** 私自身も若い頃、ミース・ファン・デル・ローエが好きで写真集を買ったりしていました。岸先生の初期作品にも、それに近い魅力を感じます。

ところが岸先生は、ある時海外で、「日本的な建築家」という評

価をされ、その後木材を使うなど、少しずつ積極的に「日本的なもの」を取り入れた作品を発表されていますね。そうしたスタイル変遷の背景には、どんな経緯や心境の変化があったのでしょうか？

**岸** 当時は、自分の建築が「日本的」だと思ったことがないので、そういう評価には僕も驚きました。スペインやイタリアなど海外のメディアから、「京都という伝統的な都市で戦っていることに共感する」などと、妙に共感されてしまったり。戦っているつもりはないのに(笑)、どういうことだろう？と思っていました。現代建築のミニマリズムと日本文化を安直に結びつけるような考え方には、警戒感をもっていましたからね。

そんななか、90年代のはじめに「紫野和久傳」という日本料理店を設計しました。これが、いわば初めて本格的に日本的な空間というものと格闘した仕事です。

**加茂** 小さな敷地の1階は閉じた空間という印象が強いですが、2階にあがると大徳寺の緑に向かつて開いていく感じが素敵です。

**岸** なにしる狭い敷地なので、庇



上/「武蔵野段丘の家」(2005年・東京都) 撮影/上田宏  
下/「深谷の家」(2001年・埼玉県深谷市) 撮影/平井広行

をつくる余裕がない。そのとき声をかけてくれた中村外二工務店の中村義明親方が言ったのは、「あんな、庇のない和風ができるやろ」。だから問題は、鉄筋コンクリートの建物で和風をどう表現するのか、でした。対面する大徳寺の建築にいかにか敬意を払うか、と言ひ換えてもよいでしょう。建物の構造はモダニズム建築そのもので、まさにヨーロッパ的。そこに木材や紙、土といった日本的な素材を使って和の空間をつくる手法を、七転八倒しながら考えました。

**加茂** やはり、現場で考えられたのですね。

**岸** 自分自身のことには、「ブルーカラーの建築家」と考えています。

は少し違います。ここは完全なプライベート空間ではなく、応接間と私室のあいだのような役割ももっていた。

**加茂** 中間的な領域ですね。

**岸** ブドワールというと、僕などはマリー・アントワネットが配下のスパイから報告を受けているような場面を想像してしまっています。侍女などもいるけれど、そこで聞いた話を口外したら、とんでもないことになる。日本でも、たとえば大奥や後宮といったものを考えれば、同じようなことが言えるでしょう。

**加茂** 私どもの実験集合住宅「NEXT 21」[\*]でも、中間領域の提案を行っています。たとえば縁側のように、公的な空間と私的な空間、または屋外空間と屋内空間の中間領域という意味ですが、そこに現代的な意味を見出そうとしています。プライベートな空間だけれど外部の人も入れる、そして子育てにおけるシッターや介護サービスといった外部のサービスを利用しながら、プライベートもしっかりと守ることができる、そんな新しい中間領域をつくらうと

そのときは、せっかく中村外二工務店と一緒にやるのだから、日本的な素材について学ぼうと思いましたが、中村さんにも尋ねたんです。「海外の編集者から、お前の建築は日本的だと言われるんですが、なぜでしょうか？」

その答えは意外でしたが、すつと腑に落ちるものでした。「あなたの建築は、重心が低いからな」というのです。

**加茂** なるほど、そういうことでしたか！たとえば床座を意識されたことはあったのでしょうか？

**岸** 現代においては、もはや床座というのはありえないと思います。お年寄りには腰に負担がかかるし、若い人ならなおさらです。立って

しています。

**岸** まさに、マリー・アントワネットのブドワールですね。

**加茂** 本当に、そうですね。私自身は京都の町家で育ったので、マシヨンと呼ばれるような集合住宅の閉ざされた空間の暮らしに驚きました。モダンな集合住宅であっても風が通り抜ける、そしてソトとのあいだにゆるやかな中間領域をもつ住まいを考えなかった。それはまたプライベートと仕事場、両方の役割をもつ併用住宅にも近いものだと思います。

**岸** 僕も、住居でもありオフィスでもあるという多機能空間として「書院/Third-place」と名付けたプロジェクトをやりました。

これは集合住宅の改装ですが、住人がお客さまなどを招いて、立礼式という椅子に座って行う茶道を勉強する場所、という特殊な目的もあった。数寄屋造りの茶室は、所作が細かく決まっているイメージがあります。しかしここは住まいとしての機能もありながら、外部の人と会うこともできる書院造りへの先祖返りということで、こんな名前をつけた。



いても、重心の低い空間はある。ともかく、この仕事をきっかけに、その後も「和」というテーマも引き受けていこうと覚悟しました。京都で建築という仕事をするなかで、「日本的なもの」と正面から向き合おうと決心できました。とはいえ、美観風致的な考え方はだけはたくありません。屋根の勾配は何寸、平入りで素材と色はこれかこれ、などという方法で「日本的なもの」を表現しても、新しいものは何も生まれないと思うからです。

専用住宅の弱さを打開するために

**加茂** 日本建築には縁側をはじめ、ウチでもソトでもない中間領域の

つくり方という意味でも、学ぶべきところは多いのではないのでしょうか。岸先生は、これからの住宅のインターフェースのつくり方について、どのようにお考えですか？

**岸** 今は住宅というと普通、家族がプライベートな時間を過ごすための専用住宅をイメージします。けれども、それは長い歴史のなかで見ると、むしろ特殊な例外的な状況ではないでしょうか？

**加茂** それは、興味深い視点です。フランス語でブドワールと呼ばれる空間は、普通「閨房」と訳され、婦人用の私室と思われています。でも実際、そのニュアンス

Third-placeというのは、都市内に居住している、すなわちhouseが都市の住居という人が、自然のなかに2番目に持つのがsecond house、そして都会に戻って自由に利用できる3つ目の場所といったニュアンスが込められています。

### 究極的には住宅も倉庫も同じ!

加茂 岸先生は、「住宅であつても内部の機能はいずれ変わっていくのだから、建築家がなすべきは外部のインターフェースを調整することだけ」と仰っています。その意味で、「住宅と倉庫は同じ」とまで明言された。

岸 それを言ったのは、住宅建築を特別視し神格化するような風潮が気に入らなかったという理由も大きい。だから、別に「住宅はオフィスと同じ」でもよかったのです。倉庫というとショックを受ける人が多いけれど、心のなかで倉庫を馬鹿にしているからだと思う。でも今はむしろ、社会のなかで重要な建築といえば、ロジスティックスを担う巨大な倉庫や、ネット

上に集積されたデータを守るサーバーセンターじゃないかとすら思っているのです。

加茂 しかし、住宅計画を専門とし、住まいのインターフェースのウチ側も考えている者にしてみると、そう言われてしまうと立つ瀬がありません(笑)。実は、「中京・風の舎」(41頁参照)という集合住宅の住戸リフォームを三澤文子さんと共同で設計したことがあります。私は計画を担当しました。集合住宅に京都の町家を再現したいと思ひ、風通しや中間領域の確保をめざしました。

岸 立つ瀬はありますよ(笑)。僕たち建築家も、具体的なニーズを考慮しながら建物を設計していることは事実です。

とはいえ、そういうプランニングの側面がいくら大切だと言っても、せいぜい100年くらいのスパンで考えるものでしょう。100年をすぎると、それが住宅として使われているかどうかすら怪しくなる。オフィスになるかもしれないし、それこそ倉庫に転用される可能性も出てくる。

加茂 そうですね。長期優良住宅

以前の公共空間では、快適に過ごせる広場の設計とか、素敵に時間を過ごせるカフェのデザインとか、むしろ逆に、人と人の内面的・精神的な距離を詰めることが大切だったのに、距離をとる空間が求められるようになった。

加茂 一方でシェアハウスやコミュニティスペースといった新しいつながり方のニーズも増えていると感じます。

岸 基本的には、経済がそういうファシリティを決めていくのだと思います。「経済が決める」というと、悪いことのように思う人もいられるけれど、そうではない。経済条件が変われば、答えは変わる。

その意味で住宅の未来を考えると、最近気になっているのがホテルなんです。

加茂 それは、どういうことでしょうか?

岸 都市のホテルは窓が閉じていて、完全にエアコンで空調されていることが多いですね。昔はそういう空間が嫌いで、たまには窓を開けて外の騒音を聞きたいと思っていました。でも、完全に閉じたカプセルのような仮想的な住宅というのもありかも、と思えるようになった。

そこに30年住むイメージは湧きませんが、たとえば人生の3分の1くらい、仕事の都合によって短

を意識している部分があるので、確かに100年はひとつの目安となっているかもしれません。

岸 僕の大好きなフィリップ・ブルネレスキの孤児養育院(フィレンツェ)などは、500年のあいだにさまざまな用途に転用され、今は美術館ですからね。

加茂 なるほど。建築家のお仕事のなかで、時代とともに住宅の外部への開き方や、インターフェース自体を変えてしまうという可能性はあるのでしょうか?

岸 1987年に設計した「KIM HOUSE」のクライアントから依頼された2011年の改装は、まさにそういうものでした。この小さな家で道路側のファサードを閉じるというのは、1987年当時の都市住宅の解としては妥当と思えました。しかし24年後に現地を訪れてみると、周囲の環境は昔とほとんど変わらず、しかも家族はご近所と親しくつきあっている。それなら、思い切ってファサードを開いてみようと思ったのです。

加茂 新旧の写真をくらべるとまったく印象が違いますね。空間のつくり方も変わっていますね。

期間であれば、そういうオプショングがあるのもいい。もちろん、実際に設計する機会があれば、まったく別物になると思います。加茂 個人を包みこむ、あるいは個人が纏う最小限の空間、といったイメージでしょうか。

岸 海外の高級ホテルなどでは、ホテルに隣接したサービスアパートメントが販売されることがあります。そこでホテルのファシリティであるルームサービスやランドリー、スパなどを利用すれば、私たちが住宅に必須だと思っているキッチンもいらなくなるし、浴室もシャワーがあれば十分で、スパに行く、広い湯船や露天風呂が待っている。

加茂 住まいのウチとソトを分ける、境界線の組み替えですね。お話を伺っていると、住宅のイメージがどんどん軽やかになってくるような不思議な感覚があります。

岸 50年間暮らした家をどうしても離れたくない、という知り合いのお母さんの話を聞きました。そういう住まいへの思い入れを、今さらながら聞くことは多い。とはいえ、住宅の将来を根本から問い

岸 基本的な構造は残っています。が、まったく別のものになっていますよ。機能的に閉じる必要があった建物をオープンにすることは可能です。古いストラクチャーを生かしながら、いかに都市に開くかを考え直せばよいと思う。

### 住宅をもっと離れたところから見つめる

加茂 時代とともに変わっていく建築のあり方を、強く意識させられる例です。先ほどサーバーセンタの話も出しましたが、最近のコロナ禍によっても、求められる住宅のインターフェースのあり方は変わってくるかもしれませんね。

岸 コンピュータも外部とのインターフェースのひとつです。Windows(窓)というネーミングは、偶然じゃありません。窓の彼方の世界とどうつながるか。社会の価値観がドラスティックに変わっていくとき、建築はITのように素早く対応することはできませんが、少し遅れて、しかし大きく変わっていきます。

コロナ禍で求められているのは、人と人の距離をとること。しかし

直すのであれば、少し距離をとり、住まいへのこだわりを捨ててみるのもひとつの方法です。そうすると、もっと楽しい可能性が見えてくるのではないかと。

加茂 想像していなかったような住まいの可能性が垣間見える、素敵なお話をたくさん聞かせていただき、ありがとうございます。

### 注

\* 大阪市天王寺区にある大阪ガスの実験集合住宅。地上6階、地下1階で、3階以上に18戸の住戸がある。1993年の竣工以来、定期的な改修を行いつつ、実際の居住を通じたさまざまな提案・実験・検証を行つた。https://www.osakagas.co.jp/company/efforts/nex21/

岸和郎(きし・わろ)。

1960年、神奈川県生まれ。73年京都大学工学部電気工学科卒業。75年同大学工学部建築学科卒業。78年同大学院修士課程建築学専攻修了。81年岸和郎建築設計事務所を設立(93年KASSOCIATES/ Architects)に改組改称)。京都工芸繊維大学、京都大学などで教鞭をとる。UCバークレー校、MITで客員教授を歴任。現在、京都芸術大学大学院教授、京都大学名誉教授、京都工芸繊維大学名誉教授、日本橋の家(92年)で日本建築家協会新人賞、ケネス・F・ブラウン・アジア太平洋デザイン賞功労賞、日本建築学会賞を受賞。主な著書に『迷巡する思考』(共立出版)、『デッドエンド・モダニズム』(UCL出版)などがある。

加茂みどり(かも・みどり)。

大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所研究員。大阪ガス入社後、リビング事業を経て、2007年より現職。京都大学博士(工学)。岡山県立大学・大阪商業大学非常勤講師。神戸市すまい審議会委員、堺市住宅まちづくり審議会委員、国立研究開発法人建築研究所研究評価委員会住宅・都市分科会委員など。集合住宅の住戸リフォーム設計「中京・風の舎」で第35回住まいのリフォームコンクール国土交通大臣賞受賞。



上/「KIM HOUSE」(1987年・大阪市生野区) 撮影/平井広行  
下/同上・2011年に改装 撮影/小川重雄